

第3章 我が国におけるダンス文化の現在～多様化・ファッション化・個別化～

1. ダンス文化の変遷

(1) 江戸期のダンス文化

舞と踊りに階級的に二分化していた舞踊は、江戸後期に芝居や歌舞伎の中に取り入れられて統合化し、新たな舞台舞踊を生み出し、大いに栄えていた。

上流階級の舞と庶民の踊りに分かれて発展してきた我が国の舞踊は、前者は貴族や武士のたしなみ・教養として、後者は庶民の娯楽として伝承されてきた。江戸時代後期になると、舞と踊りは芝居や歌舞伎、あるいは神楽などにも取り入れられ、統合された新たな舞台舞踊が舞踊文化として形成された。

つまり江戸後期の我が国のダンスは、舞楽や能がその伝統を確立して貴族や武士の重要な教養となり、田楽や盆踊りが年中行事として定着し、庶民の暮らしにおける楽しみとなったばかりでなく、江戸や大坂などの大都市においては、先進的な舞踊劇が隆盛したのである。とりわけ歌舞伎は、都市の大衆芸術・大衆文化として町人層の大きな支持を受け、世界でも先進的な舞踊文化を育んでいた。

(2) 明治期のダンス文化

急進的な西欧化政策によって伝統的な舞踊は抑圧され、洋舞の積極的な導入と奨励がなされた。そのため、邦舞・民舞は次第に衰弱し、過剰に形式化されるものとなった。

産業化と近代化を急進的に進める政府は、洋舞の導入と奨励には力を注いだ。歌舞伎や盆踊りのような大衆文化としてのダンスを低俗的な遊芸とみなし、自由闊達な舞踊表現を抑圧した。また、邦舞においても、和魂洋才の方針に基づく伝統遵守の圧力がかけられ、静的な動きによる内面美を探究することが良しとされた。このため、歌舞伎などの舞台ダンスは、照明や舞台装置などの技術面では西欧化が進んだが、その表現や動きは著しく形式化されたものとなった。この傾向は邦舞・民舞一般についても同様であった。

洋舞は、ボールルームダンスが支配階級の人々に導入され、鹿鳴館でよく知られるように外交手段として用いられた。また、西欧型均等リズムに合わせて行われるダンスが、音楽体操というかたちで学校教育などに導入された。この結果、これ以後の我が国のダンス文化は、西欧風の活発な動きの洋舞と和風の静的・様式的な邦舞とに二分されたのである。

(3) 大正期～第二次世界大戦以前のダンス

洋舞では、モダンダンスの影響を受け、芸術化が著しく進展する一方で、気晴らし・娯楽としてのショーダンスやなぐさみの社交ダンスなどの風俗化が進んだ。他方、洋舞の教育的活用も行われた。

生活様式が近代化するなか、洋舞はモダンダンスから強い影響を受け、先駆的な創作舞踊家
が出現して芸術志向が強くなった。また、舞台ダンスでは、ショーダンスやレビューが発展し、浅草
オペラ、宝塚や松竹少女歌劇団に代表される舞台ダンスが都市での新たな娯楽として庶民に楽
しまれた。邦舞は、好景気によって生まれた新たな富裕層に支持されて発展したが、歌舞伎も日
本舞踊も役者の世界である梨園と、芸者の世界である花柳界を基盤にするものとなった。また、ボ
ールルームダンスは女子の教育として評価され、一部の高等教育機関に取り入れられた。

一方、都市の新たな社交場としてダンスホールが登場し、都市市民層によって支持され、ソー
シャルダンスの楽しみが浸透する兆しもあった。しかし、男尊女卑の考え方の下で、もっぱら男性
のなぐさめとしてのダンスとして隆盛し、著しく風俗化してしまった。

(4) 第二次世界大戦以降のダンス

マスゲーム的ダンスを別にして、大戦期に否定されたダンスは、戦後の民主化とともに一
斉に開花し、多様な発展をみせた。ソーシャルダンスは学生層に支持され、競技会を催
すまでになったが、市民生活の中に定着するまでには至らなかった。

大戦期はダンスにとって受難期であった。戦争は踊る楽しみや喜びを否定し、わずかにマスゲ
ームや集団の音楽体操などがみられる程度であった。しかし、敗戦とともに訪れた民主化の波は、
ダンスのエネルギーをいっせいに解放し、レクリエーションとしてのフォークダンス、芸術としての創
作舞踊、地域社会における行事としての盆踊りなど、多様なダンスが生活のなかで復興、発展し
た。特にソーシャルダンスはダンスパーティーを通じて広く学生層の支持を得て発展し、競技会を
開催するまでになった。

しかし、このようなダンスの発展も、経済成長重視の政策に基づく仕事中心のライフスタイルの
下では、踊る楽しみを人々の暮らしに定着し、確立することはできなかった。

2. ダンス文化の現在

(1) パフォーミングアートとしてのダンス

舞台ダンスや邦舞は、パフォーミングアートとして芸術化し、もっぱら専門家によって担わ
れ、庶民にとっては鑑賞するものとなっている。

能、狂言、歌舞伎や日本舞踊は、伝統芸能として尊重され、舞台芸術の重要な領域に位置づ
けられた。その結果、主として、その道を志す専門家集団によって担われるものとなり、芸術化の
傾向をいっそう強めた。

洋舞の世界でも、モダンダンスやコンテンポラリーダンスにおいてはとりわけ創造性が重視され、
芸術的性格をますます強調するようになった。バレエは、国際的に活躍するトップダンサーも登場
し、芸術としての水準を高めている。

このように、現代日本のダンスは、総合的なパフォーミングアートとしての世界を確立し、多くの
愛好者によって鑑賞されるものとなっている。

(2) レジャー・レクリエーションとしてのダンス

伝統的なダンスが衰退する一方で、ショーやレビュー、あるいはリズム系のダンスが隆盛している。また、ソーシャルダンスが人気を回復するとともに、健康づくりを求める新たな体操的ダンスが台頭している。

産業型ライフスタイルが進展するなか、民俗行事として親しまれてきた神楽や盆踊りなどは著しく衰退し、レクリエーションとして楽しまれたフォークダンスも低調となった。代わって、ショーダンスやレビューダンスがさまざまなイベントなどでさかんに用いられるとともに、ディスコダンスやブレイクダンスのようなリズム系ダンスが盛況となり、若者文化の一領域を形成している。

また、中高年齢者の間ではソーシャルダンスの人気が復活するとともに、エアロビクスダンスやジャズダンスのような、健康づくりを求める新たな体操的ダンスが台頭している。

3. 市民生活におけるダンス文化の状況

(1) 多様化とファッション化

暮らしのなかのダンスは多様化したが、ファッション化の傾向もみられる。その結果、ダンス享受は気晴らしや娯楽の域に止まり、世代や性による格差が大きくなっている。したがって、生活文化としてのダンスの確立が求められている。

市民生活におけるダンスは、これまでのものに加えて、リズム系ダンスや健康系ダンスが台頭し、気晴らし・娯楽や健康づくりから前衛芸術に至るまでの実に多様な状況となっている。しかし、この多様性のなかにあつて、たとえばディスコブームに象徴されるように、一時的なファッションとして消費される傾向も強まっている。

その結果、人々のダンス享受の現状は、なお気晴らし・娯楽の水準に止まっており、さらに大きな性的格差とともに、新たな世代間格差が生まれつつある。

したがって、多様化の利点を生かしつつファッション化の弊害を除去し、性的格差や世代間格差を是正するには、コミュニケーションと表現のメディアとしてのダンス文化を生活文化として確立することが求められる。

(2) 専門化とマニア化

一部のダンスに見られる過剰な芸術志向は、ダンスの楽しみをマニア化した一部愛好者のみに限定する危険性を持つ。従って、常にダンス界を開かれたものとするとともに、市民の中に教養としてのダンス文化を確立することが望まれる。

時代の転換を背景にして、「諸芸術の母」としてのダンスには大きな期待が寄せられている。そのため、一部のダンスは、パフォーミングアートとしての前衛的芸術志向をいっそう強める傾向にある。総合芸術としてのダンスの発展は大いに歓迎すべきことであるが、それが一部の専門家の

理解と支持にのみ頼るものとなる場合には、ダンス文化が芸術至上主義に陥る危険性が生じる。しかも、こうした過剰な芸術志向と閉鎖的なダンス界が結びつくなら、ダンス文化はますます人々の生活と乖離し、人々に親しみ楽しまれるものから、オタク化あるいはマニア化した一部愛好者のものとなる危険性を有している。

こうした危険性を回避するには、ダンス界が常に開かれた世界であることが求められるとともに、人々の暮らしのなかに教養としてのダンス文化を根づかせ、ダンスを生活文化として成熟させ、その芸術性の理解を市民生活の中に広げ深めることが望まれる。

(3) 個人化と個別化

リズム系ダンスや健康系ダンスにみられるように、ダンス文化に個人化・個別化が生じている。従って、ダンスの共同的・社会的意義の衰退が危惧され、コミュニケーションと表現のメディアとしてのダンスの活性化が求められている。

若者文化として隆盛しているディスコダンスやブレイクダンスなどのリズム系ダンスは、基本的には個人的な踊りである。また、エアロビクスダンスやジャズダンスなどの健康系ダンスも、本質的には個別的なものである。これらは、個々人にとってはきわめて大きな生理的・心理的効果を有するものであり、その意義は高く評価されねばならない。しかしこのことは、ダンスが民族や共同体の踊りから個別階級や階層の踊りになり、さらに個人の踊りに向かう個人化・個別化への傾向を表している。つまりダンス文化は、こうした変遷のなかで、ある意味でその共同的・社会的意義を衰退させているのである。

しかし、現代社会における人間的交流と相互理解の重要性を考えると、ダンス文化が有する共同的・社会的意義はますます大きな意味をもつことになろう。したがって、ダンスには、コミュニケーションと表現のメディアとしての文化的特性をいっそう活性化させることによって、踊る楽しみを個に止めることなく、他者に開かれ、他者と交流し、踊る喜びを共有できるような共同世界を創造するよう営まれることが求められるのである。

4. 我が国におけるボールルームダンスの現状と課題

(1) 世界におけるボールルームダンスの変遷

① ボールルームダンスの発祥と確立

宮廷舞踊から集会者が交流を楽しむダンスが生まれ、次第にパートナーと組んで踊るダンスに発展した。そして名曲の誕生とともに洗練され、ボールルームダンスが確立した。

17～18世紀にかけて、ヨーロッパの荘重典雅な宮廷舞踊は、鑑賞用のショーダンスと集会者が互いの交流を楽しむダンスとに分かれた。前者は舞台ダンスとしてのバレエに、後者はメヌエット、カドリユなどの曲に乗ってパートナーとともにゆったりと踊るダンスへと発展した。フランス革命後、軽快なワルツに乗ったダンスが大流行し、このパートナーと組んで踊るダンスは、多くの名

曲の誕生に伴って発展し、ボールルームダンスが確立した。

② ボールルームダンスの発展

20世紀のボールルームダンスは、世界の多様な音楽との交流を通じてさらに発展し、ブルース、タンゴ、ルンバ、ジルバなど、豊かな国際色をもつ世界文化となった。

20世紀に入ると、世界各地に普及したボールルームダンスは、豊かな国際性と庶民性をもつようになった。まず米国で、踵から脚を運ぶフォックストロットが工夫されきわめて踊りやすくなったのを皮切りに、黒人の即興的な音楽であるジャズからはチャールストンが、哀愁に満ちた黒人霊歌からはブルースが、アルゼンチンでは情熱を秘めたタンゴなどが工夫され、諸民族の多様な音楽に特有のリズムと情緒を生かした国際色豊かなダンスへと発展していった。さらにキューバではルンバ、マンボ、チャチャチャが、そしてジャズ音楽のスイングからジルバが開発された。こうして、ボールルームダンスは、今日の洗練された世界文化へと発展してきたのである。

③ ボールルームダンスの競技化

20世紀になると、競技としての楽しみが広がり、多様な競技会が開催されるようになり、国際的なダンス教師の組織であるICBDの規程に基づき世界選手権大会が開催された。現在では、競技としての発展を背景に、オリンピック競技化の可能性が広がっている。

いずれの文化も、その内容と様式が確立、洗練されるに従って、できばえの優劣が評価され、その技能が公開の場で試されるようになる。従って、国際色豊かな内容を持ち、世界文化にまで発展したボールルームダンスが、広がりと同時に深められ、高められていくのは当然であった。1920年には早くも、英国と米国との間でフォックストロットの対抗戦が行われ、1922年には、ワルツの世界選手権も開催された。こうして、ボールルームダンスは競技としても広く楽しめるようになったのである。

ボールルームダンス競技においては、多種目にわたる踊りの技能とともに、パートナーシップや美的表現力も評価されることから、客観性をめぐる問題が生じやすい。このため1929年には、評価基準を定める専門家によるオフィシャル・ボード(公式委員会)が設置され、さらに1950年には、国際的なダンス教師の組織であるICBD(国際ボールルームダンス評議会)が創設された。そして1959年に、ICBDの規定に基づく最初の世界大会がロンドンのブラックプール開かれ、以後、それがもっとも権威ある競技会として位置づけられるようになった。他方、アマチュアの国際組織としてIDSF(国際ダンススポーツ連盟)が存在し、これがIOC(国際オリンピック委員会)の公認を受けたことから、ボールルームダンスがオリンピック競技になる可能性が高まっている。

(2) 日本におけるボールルームダンスの変遷

① 明治期のボールルームダンス

開国とともに移入されたボールルームダンスは、国策により華族や官僚の間で一時的に繁栄するが、政策転換によってその姿を消した。

開国とともにボールルームダンスは日本に移入され、1867年、最初の舞踏会が東京浜離宮の延慶館で行われた。1883年には、欧化主義の象徴として有名な鹿鳴館が日比谷に建てられ、諸外国の高官を招いて政治家や官僚による舞踏会が催された。そこには、舞踏会を通じて日本近代化の一側面を見せることにより通商条約の改正を有利に進めようとする意図があった。また、総理大臣官邸でも、同様の趣旨で舞踏会が頻繁に催され、華族、政府高官、学識者などの当時の名士が集い、ボールルームダンスに興じた。

しかし、このようなかたちで奨励されたボールルームダンスは、国策変更によって一挙に衰退する。1889年、ナショナリズムが台頭するなかで、政府は舞踏会を禁止した。その結果、明治期のボールルームダンスは、上流階級の世界において一瞬花開いた幻と化し、姿を消したのである。

② 大正期のボールルームダンス

ダンスホールの開設によって、ボールルームダンスは市民社会のなかで復活し、ブームとなった。しかし、入場券と引き替えに職業女性と踊るシステムから、男性が一時的ななぐさみを得る不健康な営みとみなされ、風俗営業法の対象とされた。

1918年に、横浜鶴見の花月園に最初のダンスホールがオープンし、バンドあるいはレコード演奏に合わせて踊るボールルームダンスが復活する。これを契機に、東京や大阪などの大都市にダンスホールが次々と誕生して大いに賑わい、ボールルームダンスは一つのブームになった。

ダンスホールは当初、同伴した異性と踊りを楽しむ場であったが、その後、男性客が入場券と引き替えにホールが用意している職業女性ダンサーと踊るというスタイルのものとなった。つまりそれは、男尊女卑の社会的風潮を反映して、男性が入場料を対価として職業女性ダンサーを相手に踊るものであり、男性が一時的ななぐさみを得るものであった。このことによって、“両性が平等なパートナーとして踊り、交流を楽しむもの”というボールルームダンスの本来の姿は著しく歪曲され、ボールルームダンスは不健康なものとみなされた。その結果、1925年には、ダンスホールが風俗営業法の対象とされ、未成年者や学生の入場が禁止されたのである。

③ 昭和初期～第二次世界大戦までのボールルームダンス

ダンスホールが活況を呈するなか、教習所で学び、ホールで踊るというボールルームダンスの享受スタイルが形成された。しかしそれは、依然として男性の一時的ななぐさみの文化という性格をもつものであった。

昭和に入っても、ダンスホールは数少ない男女交際の場・社交場として人気を得ており、国華、ユニオン、帝都、フロリダなどの有名なダンスホールが相次いでオープンし、最盛期にはその数は300にまで達する盛況をみせた。また、ダンス教習所も次々と誕生し、1930年には、JATD(日本舞踏教師教会)が設立され、ボールルームダンス指導の研究も進められた。

こうして、教習所で学び、ホールで楽しむというボールルームダンスの享受パターンが形成されたのである。しかし、ホールでの踊りのスタイルは、相変わらず男性が職業女性ダンサーを相手とするものが中心であった。そして、国家総動員令が布告された1940年、ダンスホールの閉鎖が決定し、日本のボールルームダンスは再び姿を消すことになったのである。

④ 第二次世界大戦後のボールルームダンス

学生層を中心としたダンスパーティーで楽しむという新たな享受スタイルと、競技化・スポーツ化の進展によって、ボールルームダンスは広く市民社会のなかに広がり、健全な趣味として発展し、生活文化となる可能性が生まれた。

1946年、終戦の翌年には早くもダンスホールが復活し、抑圧から解放されたボールルームダンス愛好者が集い、楽しむようになった。そして、民主化とともに生まれた新たな男女関係のあり方を背景に、ボールルームダンスは学生層の間で急速に広まり、1950～60年代に大ブームとなったのである。

しかもこのブームは、非営利の自主的なダンスパーティーの開催を伴うもので、ボールルームダンスをホール中心の営みから、公開の場の営みに移すという大きな意義があった。その結果、ダンスホールは一時的に衰退するが、ボールルームダンスは健全な営みとみなされるようになり、市民社会に根ざした生活文化となる重要な契機を手にしたのである。

ボールルームダンスの健全化には、その競技化も大きな意味をもっていた。1947年、早くも日本舞踏競技学生競技会が開催され、1950年には日本舞踏競技連盟が発足し、その翌年には全日本舞踏競技選手権大会が開催された。この競技化の進展にともなって、ボールルームダンスは、これまでの不健康なものという見方を払拭し、健全なスポーツとしての社会的認識を得るようになったのである。その結果、1984年にはNHK教育テレビの趣味講座で「レッツダンス」が放映されるにいたり、ボールルームダンスは健全な趣味としての社会的認知を確立した。

(3) 我が国におけるボールルームダンスの現状と課題

① ボールルームダンス愛好者の現状と課題

ボールルームダンス愛好者は、中高年女性を中心であり、洋舞愛好者全体で見れば、およそ180万人で、年々減少している。しかもそこには、性、世代、地域による格差が認められ、特定の人々の文化としての性格が表れている。

我が国におけるボールルームダンス愛好者の数は、余暇開発センターの「レジャー白書2000」による洋舞愛好者からみれば、多く見積もっても180万人程度とみなされる。その数は、昭和52年の450万人をピークに年々減少しており、歯止めがかかる兆しはみえない。

洋舞愛好者のうち、80%は女性であり、そのうち、60%は50代以上の人々である。それでも、女性の場合は、30代を除く各世代に愛好者がいるが、男性の愛好者は50代以上に限られている。

また、享受者の地域格差も存在する。東京都や新潟県、三重県、奈良県、和歌山県では人口の

3%が享受しているが、北陸地方、中国地方や岐阜県では0%、また、愛知県や兵庫県では大都市を抱えているにもかかわらず1%以下となっている。近年では、教習所とは別なかたちでのサークル活動が増えつつあるが、なお一般的な状況にはない。

このような性、世代、地域による格差の存在は、我が国のボールルームダンスがなお大衆化されたものではなく、特定の人々にのみ支持される狭い範囲の文化に止まっていることを示している。

② ボールルームダンス享受の状況

愛好者の活動状況はきわめて熱心なものであるが、そこには、ある意味でのマニア化がみられ、この世界の閉鎖性と過剰な競技志向による弊害が示唆されている。

洋舞愛好者の享受状況を回数と費用の面から捉えてみれば、回数では、年間平均46.8回でほぼ週1回という割合を示し、趣味・創作部門においては機器による音楽鑑賞に次いで第2位、スポーツ部門でも体操に次いで2位である。費用は、年間平均86,400円であり、趣味・創作部門では第1位、スポーツ部門でもゴルフ、海洋スポーツに次ぐ第3位の位置を占める。

このことは、ボールルームダンスの愛好者は、その数は少ないがきわめて熱心な取り組みをしている一群の人々から成っており、その意味では、ボールルームダンスは強固な社会的基盤を有しているとみることもできる。しかし、そこには同時に、専門化、マニア化、オタク化の傾向もうかがえる。このことは、ボールルームダンス愛好者の世界が閉鎖的であることを示唆するものであり、過剰な競技志向による弊害を表わすものと思われる。

他方、公民館やカラオケホールで踊る機会が広がり、教習所とパーティーという閉鎖性を打破する傾向もみられるが、そこには同時に軽薄化の傾向も生じている。

③ ボールルームダンス享受の環境

ボールルームダンス享受の環境は依然として未整備なままである。この状況は、未経験者が気軽にボールルームダンスに取り組むことをきわめて困難にしており、普及、振興の大きな妨げとなっている。

人々がボールルームダンスを楽しむ環境はきわめて限定されている。その多くはダンス教習所であり、不慣れな者は気軽に立ち寄ることが困難であるとともに、経済的負担も少なくない。また、ダンスパーティーも単に衰退しているだけでなく、そこでの踊りはリズム系のダンスが主流となっている。公共施設利用によるサークル活動はきわめて熱心であるが、楽しく踊って自由に交流を楽しむというよりは、指導者に教わり習うスタイルが主流であり、開放性と広がり欠ける。このような環境にあっては、未経験者が気軽に取り組むことはきわめて困難であり、こうした享受環境の未整備がボールルームダンスの普及、振興の大きな妨げになっている。

また、大衆レベルでみた場合は、相変わらず風俗的世界の認識が残っており、ボールルームダンスの名に値しない一時的ななぐさみの場となっていることも少なくない。そのため、ボールルームダンスに対する偏見と蔑視は、なお完全には払拭されず、残り続けている。

④ ボールルームダンスの競技会と競技者の水準

全英ダンス選手権がもっとも権威ある競技会であり、JBDFの競技者は上位入賞の水準を保っている。国内競技会は多岐にわたるが未整備である。プロとアマの競技水準には大きな差があるが、ボールルームダンス振興のために競技会体制の整備が求められる。

国際競技会では、ブリティッシュ・カウンシルが公認する全英ダンス選手権がもっとも権威ある競技会とされ、JBDF(日本ボールルームダンス連盟)の代表競技者が例年参加して上位入賞を果たしている。アマチュアの競技会では、IDSF(国際ダンススポーツ連盟)主催の世界選手権大会などがあり、JDSF(日本ダンススポーツ連盟)の代表競技者も出場しているが、70～80位前後の成績である。このように、わが国のプロとアマの競技水準には大きな差がみられる。

国内競技会には、JBDF主催のプロフェッショナルダンス選手権、全日本10ダンス選手権、スーパージャパンカップダンス選手権やJBDF傘下の地域組織が主催する競技会などがある。アマチュアでは、JDSF主催の全日本オープンダンス選手権やジャパンカップグランプリなどがある。

このように、国際的にも国内的にも競技会は多岐にわたる。一見すると、この多様性はボールルームダンスの普及、振興に資するように見えるが、実態としてはそのように機能していない。従って、プロ・アマの統合をふくめた、競技会体制の整備が急がれる。

⑤ ボールルームダンスの組織

教習所教師を中心に進められたボールルームダンスの組織は、歴史的経緯や人間関係、関係団体の利害などを背景にして、きわめて未整備な状況にある。ボールルームダンスの普及、振興のためには組織の連携から統合への道が求められなければならない。

ボールルームダンスは移入文化であり、また、学校教育で本格的に取り上げられなかったこともあって、その指導はダンス教習所の教師を中心に進められた。その結果、ボールルームダンス組織も教習所および教師中心に構成され、さまざまな団体が乱立していた。しかし、1950年には社団法人日本社交舞踊教師協会が設立され、同協会を中心として、同年に日本舞踏競技連盟が誕生する。1976年、同連盟は日本競技ダンス連盟と改称、さらに1992年には、財団法人化を契機にして、JBDF((財)日本ボールルームダンス連盟)の名称を用いることになった。しかし、この財団化の過程で、JDC(日本ダンス議会)が、さらにそこからJCF(日本プロフェッショナルダンス競技連盟)が任意団体として分離独立する。この意味で、日本のボールルームダンス組織は多岐にわたって分化し、一元化とはほど遠い未整備の状況を呈している。

一方、ボールルームダンスの普及にともなってアマチュアの組織も誕生する。1977年には、リーグアマチュア競技ダンス連盟が、学生競技ダンス連盟、社会人ダンス連盟と統合してJADA(日本アマチュアダンス協会)を設立し、1999年にはJDSF(日本ダンススポーツ連盟)と改称した。そして、JDSFが加盟しているIDSF(国際ダンススポーツ連盟)がIOC(国際オリンピック委員会)の承認を得たことから、ボールルームダンスのオリンピック参加の可能性が生じている。

従って、卓越したプロフェッショナルな力を持つJBDFと国際的な認知を得ているJDSFの関係の調整が具体的な課題となるようになった。

このように、ボールルームダンスの世界では、競技会制度および組織体制がきわめて未整備なままに推移してきており、ボールルームダンスの普及と振興に大きなデメリットをもたらしている。オリンピックへの参加問題も含め、これからのボールルームダンスの発展には、組織力を結集することが何よりも不可欠であり、アマチュアはもとより、プロフェッショナルもふくめた愛好者全体を統括する組織の確立が望まれるのである。

(4) 豊かな市民生活とボールルームダンスの課題

ボールルームダンスが、市民社会のなかでその豊かな可能性を拓くには、生活文化としての確立が求められる。そのためには、ボールルームダンスを生涯スポーツのなかに位置づけ、誰もが享受しうる文化的享受支援システムを構築することが望まれる。

ハイテク文明とIT(情報技術)革命が進展するなか、エコロジー、環境、共生などがテーマとなる21世紀の市民生活において、ボールルームダンスがもつ文化的意義はきわめて大きい。ボールルームダンスは、健やかな生、豊かな交流、伸びやかな自己の開発を求めて歩む人間的熟成に向かうライフスタイルの創造に対して、大きく貢献しうる可能性を有しているからである。

しかしながら、我が国のボールルームダンスは、歴史的経緯から生じた偏見と蔑視のなかで、専門化と風俗化の二極分化の傾向を有しており、その豊かな可能性を市民生活のなかでなお拓ききれずにいる。このような閉塞的状况を打破するためには、関係者が力を結集し、ボールルームダンスの文化的意義の重要性を自覚するとともに、それが有する本質的な価値への気づきを基調としたコミュニケーションと表現のメディアという文化的特性の理解を広げ深め、ボールルームダンスを人々の暮らしと地域に根ざした生活文化として確立することが求められる。

市民社会における生活文化としてのボールルームダンスの確立を展望するとき、生涯スポーツという大きな流れのなかにこれを位置づけ、子どもや障害のある方、高齢者から競技者にいたるすべての人々が、その文化的意義を豊かに享受しうるボールルームダンスの文化的享受支援システムを組織的に構築していくことが望まれるのである。